慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	森下二次也編 商業経済論体系
Sub Title	The economic theory of commerce, ed. By Fujiya Morishita
Author	庭田, 範秋
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.8 (1960. 8) ,p.725(55)- 729(59)
JaLC DOI	10.14991/001.19600801-0055
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600801-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自性を消去して、国民的な結合を達成することにあった。教会は国民的団結を教えた。カルヴィニストが指導者となったのは、この運動に関してであったのである。

カルヴィニストの社会問題に対する関心は、スペインからの危険に関連したものであった。都市の政治や商業活動の如き、国内的なものに関してではない。これらの問題についてのカルヴィニストの主張は矛盾に満ち、迫力のないものであった。教会の代表者すらも、経済行為を宗教的規範によって判断することを避けようとした。経済活動を宗教の側から正当化するということに躊躇したのであった。教会はある程度まで経済生活に対し監督を試みた。しかし経済活動の全般にわたることはなかった。彼らはその努力を社会の末端で生活する人々に向けた。ロンバール人・海賊・宿屋の主人の仕事に対して批判の眼を向けるにとどまったのである。

カルヴィニストの教会はまた社会の一部の人々がその生活を貴族化することに反対した。しかしその大勢を阻止することはできなかった。十七世紀を通じて富裕な商人はその経済活動から引退して都市の役職につき、また地主に転化した。この傾向の結果として起ったことは、十八世紀における寡頭政治であった。

カルヴィニズムがオランダにおいて意味を持ったとすれば、危機に際して、国民的団結を教えたことにあった。経済行為に対する教説として、むしろそれは、資本主義的傾向を促進する方向にはなかった。リーマースマ氏はそう論ずるのである。

六

ウェーバーとトーニーがいう如く、カルヴィニズムの精神が資本主義の発達を促進したという主張は、イギリスについて妥当するかもしれない。しかしオランダについては、カルヴィニズムの滲透する以前に、自由な特権を持った諸都市が、その経済的基礎として商業活動を営んでいたという歴史的事実を否定することができない。となれば、オランダにおけるカルヴィニズムの貢献は、資本主義精神の発達をめぐってではない。むしろ、オランダに固有な自治都市を、スペインの支配から守り、強力なローマ教会の支配から守って、あくまでも商業活動の自由を保障した点にあろう。そのための反抗的な力を組織した点に、カルヴィニストの大きな貢献を見出すべきではないか。しかしその反面、教義に弱く、伝統的な経済理念を排除することができなかった。むしろ旧勢力に妥協さえ示した。イギリスにおいては、カルヴィニズムの運動はピューリタニズムの運動として結実し、資本主義の勃興に大いに寄与した。しかしオランダにおいては、これとは逆に、資本主義の発展を決定的に促進したということはなかった。リーマースマ氏の小論は、究極において、そのことを結論しようとしている。ウェーバーやトーニーによるカルヴィニズムの特徴づけをめぐって、近時批判が多いが、これもまたその一つであった。

（渡邊　國廣）

森下二次也編

『商業経済論体系』

かつて、あるものの書に、次のごとき文言のあったことを想い起す。それはマルクス経済学の現状についてであるが、現在、自由諸国においては、社会科学の分野にあってマルクス経済学はほとんど影を消したといってよい。少なくもその正統派理論の信奉者の発見はきわめて困難である。しかるに、その例外として、わが国にあっては、マルクス経済学は依然として隆盛のきわみにある。共産圏内の諸国のそれに比して、ほとんど遜色のないほどの活況にある。それはまことに特色ある現象であって、今後この傾向がどこまで持続されるかが興味の対象であると。

わが国におけるマルクス経済学は、たんにその理論の分野だけでなく、歴史の考察に際しても政策の研究においても、実に多大の学問的収穫をあげてきた。それはまた経済学の分野においても成果を示しつつあり、社会科学のあらゆる分野に浸透しつつある。すなわち商業学にあっても、また若干の貴重なマルクス経済学に基づく成果が示されているが、本書の誕生は、さらにそれに一を加えるものである。本書はマルクス経済学による商業理論の書物である。

本書の「序章　商業経済学の対象と方法」（一～四五頁）は、商業学の研究者にとっては興味深いものがある。それはまずマルクス経済学の立場から、従来の商業学説、すなわち交換説、再販売購入説、配給説および機能説を整理して記述し、その学説史的価値を認めながらも批判を加えて、ここに商業を、交換説や配給説とは同視を許さないところの商人の再販売購入とし（一五～一六頁）、さらに商業の領域を、「生産を伴わない再販売購入」（二二頁）とし、「第三者が、結局の交換当事者の間に介入してなす再販売購入は、交換ないし流通の全過程の部分でありながら、他の部分とは異質の存在として対立し、自ら独自の一領域をなすこととなる。それはただに商業とよぶにふさわしいというにとどまらず、全過程とは区別して特に商業とよぶ必要のある領域である。そしてそれ故にこそまたそれは商業経済論という一個の部門経済学をもって特殊の研究を展開するに値する独自の対象領域ともなるのである。」（二四頁）一応マルクス経済学によりながら商業を定義したものとして特色が認められる。そしてさらにこれに続けて商業経済論の方法が論述せられているが、ここにマルクス経済学による商業学の方法論が体系的に示されている。

本書は、商業の歴史に関しても相当詳しく触れている。それは「前資本主義商業とその理論」（四七～八三頁）、「独占以前の資本主義商業とその理論」（八五～一八三頁）および「独占段階の資本主義商業とその理論」（一八五～三四〇頁）の三段階に区分し、さらに各段階をまた細分して、商業の発達史に平行させながら、その

時々の商業思想などにも関連をもって筆を進めている。前資本主義の商業の特徴を、「生産が資本によってつかまれていない時代の商業」（八二頁）、この時代の仲介商業の利潤の大部分を「不等価交換――その方法としては詐偽瞞着が通常のやり方であるが――から得られるが、その極端な場合には盗掠との差はつけ難い程である」（八三頁）と明記している。ついで資本主義商業の成立について述べ、「資本主義商業は自由競争の支配していた資本主義の独占以前の段階において急速に発展した」（九八頁）、「資本主義生産方法確立の過程は前資本主義商業の衰退過程であると同時に、資本主義商業の成立過程でもあった」（九六頁）が、資本主義生産の発展、産業資本の増大と労働の生産性の上昇につれて、「商人の地位と生産者の地位とは逆転し、商業は産業的生産の奉仕者になるのである」（九六頁）、形式上はこれまでの商業資本がそのまま存続し、ますます発展するのであるが、産業資本の確立するにつれて、これまで生産を支配していた商業資本は、産業資本の代理者としての機能をはたすことによってのみその存在の余地を与えられることになった。商業資本の本質が変ってしまったと。

商業の発達史を述べるのと平行して、第二章と第三章で、商業経済学の基礎的な主要理論が展開されている。そこでは資本の流通過程に関する理論が展開され、商品取扱資本が抽出され、商業資本の自立化が指摘され、商業資本の運動が分析せられている。ついで商業利潤と商人利得が論じられ、さらに個別商業資本の回転の問題に触れられて、最後に商業労働におよんでいる。その内容は商業資本論とでもいうべきか。

本書においてもっとも注目すべきところは、第四章（一八五～二二〇頁）、第五章（二二一～三〇二頁）および第六章（三〇三～三四〇頁）の「独占段階の資本主義商業とその理論」の部分である。それはまず産業における独占の形成と商業の関係の追求より始められる。独占段階における独立の商業資本の地位の低下を必然化させる事情と、商業資本の排除との関係での社会的な不生産的流通費用の増減およびその負担者の問題、この主要重大問題の解析を、産業資本と商業資本との分業関係の特殊性、産業における集中・集積と商業資本および社会的流通費の基本的性格とその独占段階的特質の諸点より行なったことは、その成果としての結果をきわめて優れたものとした。独占段階における商業資本の地位と機能の質的変化は明らかにされたといえる。

続いて商業独占の形成と流通機構の変化が述べられている。それは資本主義発展の基本法則が独占段階における流通過程に現象する具体的な様相の解明である。そして生産過程における生産および資本の集中と集積は流通における資本の集中と集積の前提条件を作り出し、再生産過程の統一性とそこにおける生産の規制的地位に基づいて流通過程の大規模化が必然的なものとして要請されたのであるが、さらに流通内部において大規模化への論理的必然性があることもまた忘れてはならない。しかしてかかる大規模化の要請に刺戟せられて商業における資本の集中と集積、独占の形成が実現され、これを推進して現実化するものは、その直接の要因は商業における競争であると述べている。かかる諸過程を通じて、独占的商業資本は、その本質において流通過程において機能する金融資本の一部として生長する。「産業および商業における独占の形成、その金融資本への融合転化にともなう商品流通機構＝配給組織の存在様式変化の基本動向は通俗的には『商業排除』としてとらえられている」（二三一頁）、「独占段階における流通過程特にその機構の変貌は流通資本量の膨大化、寄生的商業資本の増大、然して独占化すると否とに関わらず商業資本の独立性の喪失という形態的特徴を示すのである」（二三七頁）、そしてこれらの具体的な諸様相を追求しているが、わが国のそれへの記述をも含める本書の第五章は、まさに圧巻である。

さらに続いてのマーケティングの展開の部分も一読に値する。資本主義の基本的矛盾である生産の社会的性格と所有の私的性格に基づく生産と消費の不均衡の、独占段階にいたってのかつてないほどの激しさを加えたことの指摘より説き起して、「不断に拡大する生産と、漸次狭隘化する消費市場との矛盾、生産と消費の矛盾はますます拡大する。」（三〇四頁）いまや生産ではなく流通が独占資本の死命を制する緊要事となる。「かくて科学的に市場の態様を究明し、それに対して市場によって要求せられるごとき商品を、需要者にとりもっとも適当な配給機関（従来の商業資本のみならず、広告、自己販売員等）を通じて販売すること、そしてこれらの個々の活動をより合理的に遂行するのみならず、これら諸活動を綜合的に計画するようにすることが必要となる。」（三〇四頁）これがいわゆるマーケティングであり、マーケティングとは市場問題の激化に際しての独占資本の市場争奪競争の手段であり、独占資本による市場支配のための諸方策の総称である。「要するにマーケティングは独占資本主義の産物」（三〇五頁）なのであると断じている。そしてアメリカにおけるマーケティング問題の発生を述べ、さてマーケティングの展開として、その技術の展開と研究の展開を示し、さらに技術革新のマーケティング、マネジリアル・マーケティングの成立と展開におよんでいる。実はこれら第六章の部分は、近時特に強い関心を社会一般より示されているところであって、第五章に続いて相当の力と頁数をさいてもらいたかったところであるが、それにしてはこの部分はやや薄手の感がしないでもない。

「社会主義商業とその理論」なる第七章（三四一～三九一頁）は、資本主義商業との比較において意味のあるところであろうが、「社会主義商業と資本主義商業との相違」（三四六～三四八頁）でそれをなしている。「資本主義商業は資本主義の生産関係を拡大し、ブルジョア社会に固有な矛盾をふかめることによって、資本主義を滅亡へみちびくが、社会主義商業は社会主義の生産関係を強め、生産力と社会的労働の生産性をいちじるしくたかめて、共産主義への漸進的移行を可能にする。」（三四七～三四八頁）かかる結論を明示して、ソヴェト商業と人民民主主義諸国の商業の説明がなされている。

本書は、確かに「商業経済論体系」の名にふさわしい。それには商業学説があり、商業学の方法論があり、商業発達史があり、商業資本の理論があり、商業の現状分析がなされてあり、マーケティング論があり、社会主義社会の商業にまでおよんでいる。それは絶えず産業資本との関連を保ちつつ、商業資本独自の展開として研究されている。わが国のそれに触れる部分も少なくはなく、全体として、資本主義経済社会における商業への批判が強い。われわれは本書を通じて現段階の商業が、過去からいかにしておよんできたか、そしてそれが現にいかなる矛盾と問題点を孕んでいるかを知るであろう。

あらゆるものがそうであるごとく、本書も決して無欠点とはなしがたい。まず商業の発達過程や現実の記述に際し、具体的な数字・数表をより多く挿入すべきではなかろうか。これをしたならば、その主張はより一段と明確に容易に理解されうるであろう。ついで本書の第二の欠点は、いわゆる商業補助業あるいは補助商業と商業との関連の記述がほとんどないということである。なるほど本書では「商業の内容は、商品の運輸、保管、分割、選別、混合、仕上げ、包装などを含まない」(三一頁)とはしているけれども、しかし「商人ないし商業組織の実際活動が、売買とともに運輸、保管、分割、選別、混合、仕上げ、包装などを含むということは、否定することのできない事実としてこれを承認せざるをえない」(二八頁)ともされるのであって、特に商業の発達過程においては、これらとの関連も触れられる必要性が大なのではなかろうか。

資本主義の生成と発展の全過程を通じて、国家がそれぞれの時期に、きわめて微妙な役割をしていることは事実である。特に商業に関しては、産業資本の場合とは別に独特なる政策が展開されている。それはある場合においては商業統制であり、また他の場合には中小商業の保護政策ともなった。その他機に応じて各様の商業政策がとられているが、本書では、国家による商業政策の理論および実際に関し、触れるところがきわめて少ない。

商業はこれを大きく分ければ、国内商業と貿易となるのではなかろうか。この両者を同一に扱ってよいのだろうか。商業学としては、この両者の関係をいかに理解したならばよいのか。貿易は商業であるかないか。商業であるとしたならば、いかなる位置を商業および商業学内において占めるべきか。たとえば本書の独占段階の資本主義における商業について論述する個所で、植民地や後進国の貿易・輸出入問題には、決して明確なる記述がなされていない。先進諸国・強大国の国際経済社会における商業・貿易上の諸行為とその諸影響等々。つまり貿易の問題を抜いて、現代の商業の十分なる把握が可能であるかどうかということである。

本書の理論的内容以外にも、一つの問題点が残されている。それは理論記述の文体とその使用する文言についてである。それはマルクス経済学の書とはいえ、いささか陳腐の表現が多い。静かなる言葉で、静かなる態度のうちに述べられてこそ、その主張する真理は、よりよく、そしてより広く、読むものをして納得せしむるのではないだろうか。従来からのマルクス経済学は、この点に関し一種独特なる文言と表現をあまりに多く持ちすぎている。読むものをして、内容とは別に〝またか〟の感を沸かしてしまうのはその大なる欠点である。本書でもこの感は免れない。些細なことではあろうが。

さて本書は、その「はしがき」(一～六頁)において述べられているその使命を十分に果すものであろうと思われる。本書はたんなる商業の技術の解説や現象の記述だけのものではない。そこで述べられているものは「商業にかんする科学的な理論体系」(はしがきの三頁)である。「高い水準の理論」(はしがきの三頁)である。そして本書が森下二次也氏の編のもとに、茂木六郎、山本朗、橋本勲、風呂勉、荒川祐吉および井上幸一の諸氏によって分担執筆されたものでありながら、決して形式の不整や用語の不統一などに陥入らず、十分の調整がゆきとどいていて、各章の連結も円滑に、内容もよどみなく流れて、ここに共同著作の好成果を示されたことは、今後の学界の研究推進とその業績発表の方法の、将来を卜する一実例としても、高く評価できよう。本書の刊行を商業学者・学徒こぞってこれを喜ぶであろう。

(森下二次也編。序章、第三章第一節を森下二次也、大阪市立大学教授。第一章を茂木六郎、長崎大学助手。第二章を山本朗、大阪市立大学講師。第三章第二節以下を橋本勲、香川大学助教授。第四章を風呂勉、神戸商科大学講師。第五章、第六章を荒川祐吉、神戸大学助教授。第七章を井上幸一、松山商科大学助教授がそれぞれ担当執筆。はしがきが六頁、目次が八頁、本文が三九一頁、事項索引が九頁、参考文献目録が一五頁。文人書房。A5判。昭和三十四年九月二十日発行。五〇〇円。)

(庭田　範秋)

佐々木俊次著

『ロシア思想史――スラヴ思想の展開――』

佐々木俊次氏の「ロシア思想史」は、つぎの諸章よりなる大著である。

第一章　ロシアにおける社会革命思想の形成
第二章　スラヴ統一の志向と最初のスラヴ合同運動
第三章　スラヴ主義の創始者イワン・ワシリエヴィチ・キレーエフスキーと彼の思想
第四章　アレクセイ・ステパノヴィチ・ホミャーコフ
第五章　コンスタンチン・セルゲエヴィチ・アクサーコフ
第六章　スラヴャノフィールのスラヴ思想から汎スラヴ主義へ
　第一節　ユーリー・フェオドロヴィチ・サマーリン
　第二節　イワン・セルゲエヴィチ・アクサーコフ
　第三節　ミハイル・ニキフォロヴィチ・カトコフ